

【教育振興支援助成報告】

「国際社会観光」基礎教育体系の研究」成果報告

平成 30 (2018) ~ 令和 2 (2020) 年度和洋女子大学教育振興支援助成報告

藤丸麻紀、里正明伍、板垣武尊、金丸裕志、秦泉寺友紀、杉浦功一、山崎真之

Report on “Research on Basic Education System for International Social Tourism”

FUJIMARU Maki, SATOMASA Meigo, ITAGAKI Takeru, KANAMARU Yuji,
SHINSENJI Yuki, SUGIURA Koichi, YAMAZAKI Masayuki

要旨

本報告は、2018～2020年度の研究成果報告である。2020年度に新しく国際学部国際学科が設置されたことにより、国際社会観光についての基礎教育体系を精緻化し、教材の作成を行った。さらに観光PBL (Project Based Learning) 教育方法を探求し、企業や自治体とのPBLの拡充と、プロジェクトの経験からよりよい教育方法を探るFDを行った。

本稿では、『キーワードで読む国際観光』(国際学部国際学科編の冊子) で取り上げた内容について、学科FDで情報交換した過去のPBLの経験から学んだことについて、そして昨年度の急なコロナ禍でも積極的に行ったオンラインPBLの内容について、プロジェクト参加メンバーで分担執筆した。

キーワード：PBL 観光 教育

1. プロジェクトの目的・概要について (里正)

和洋女子大学教育振興支援助成による本プロジェクトは国際学部設置に当たって国際学科のカリキュラムの重要な部分を占める「国際社会観光」の基礎教育体系の精緻化と具体的な展開のあり方を模索したもので2018年度から2020年度まで3年間に亘って研究が行われた。

国際学部国際学科では学士力の根幹を成す国際教養と高い語学運用力、コミュニケーション能力を身につけながら、観光をはじめとする国際交流に関する知識と技術を学んでいく教育内容がカリキュラムの重要な部分となっている。国際学科の既存の諸条件のもとでこのカリキュラムを実質的に効率よく展開するためには専門の異なる各教員が互いに連携をとりながらそれぞれの専門的見地から「国際社会観光」にアプローチし教育を行なう必要がある。その連携のあり方の模索として基礎教育の体系に関する共同研究は重要であり、本プロジェクトはこのような連携の模索と同時に、国際学科独自の「国際社会観光」教育の基礎の部分の体系の精緻化を目的としたものである。

この研究プロジェクトは主に次の3つの部分から構成されている。(1)「国際社会文化」と「観光」の有機的な連結に関する研究及び関連教材の作成。この連結により国際学部独自の教育体系を実現し、社会的ニーズに十分に答えられる人材を育成することができるようになるが、それに向けて共同で理論研究を

行い、教材を作成する。(2) 学科カリキュラムの重要な柱の一つとしての観光PBL教育方法の探求。PBLは5つのテーマ（「産学連携プログラムによる課題探求を行う」、「観光による地域活性化」、「観光デザインコンテストへの参加」、「観光・国際交流イベントなどのボランティアへの参加を通して観光の『心』を探求する」、「観光関係のインターンシップに参加して職業としての観光について理解を深める」）のもとで実施されるが、調査・企画・実施の方法、ICT活用等の教育方法を研究する。(3) 「国際社会観光」教育の評価枠組の研究。「国際社会観光」は新しい教育であるため新しい視点でその仕組みのあり方について研究する。

このような目標・計画のもと各研究年度において主に次のように研究が進められた。(1) 2018年度：「国際社会」と「観光」の有機的な連結に関する研究及び関連教材の作成に関しては基礎教材につながる学術著書、李明伍・臺純子編（2018）『国際社会観光論』志學社の共同執筆という形で共同研究を重ね、観光PBL教育方法の探求に関しては「産学連携プログラムによる進行形の課題探求を行う」と「観光による地域活性化」のテーマを中心に、ICT活用を含めた教育方法を研究する、という目標のもと、成田国際空港、京成電鉄などの企業と産学連携を進めた。(2) 2019年度：「国際社会文化」と「観光」の有機的な連結に関する研究及び関連教材の作成に関しては、前年度に完成した学術著書『国際社会観光論』の共同研究の成果を活かし、基礎教材『キーワードで学ぶ国際観光』の作成を行った。この基礎教材は基礎理論篇と観光現象篇からなり各研究員の専門的視点による国際観光分析が131項目収められている。また、観光PBL教育方法の探求では主に、京成電鉄と3つのプロジェクトを遂行し、青戸商店会連合会、墨田区商店会連合会とのプロジェクトも実施し、成田国際空港による特別授業も行われた。(3) 2020年度：「国際社会」と「観光」の有機的な連結に関する研究及び観光PBL教育方法の探究に関しては京成電鉄沿線観光関連PBLの成果として「和洋女子大学生が考える理想のデートコース」という冊子を作成し、技能実習生生活支援機構や日本デザイン振興会、専門家などによるオンライン講習会を実施、学生にはiPadによる動画の撮影・編集などを行わせるなどの形で教育方法を探究した。また、「国際社会観光」教育の評価の仕組みの研究に関してはFDなどを通して検討を行った。

2. 『キーワードで読む国際観光』について

本プロジェクトの成果として作成した『キーワードで読む国際観光』の中で取り上げた用語や、授業の中で使用した際の学生の反応などについてまとめる。

(1) VRと国際観光の関係について（藤丸）

私は国際観光のキーワードとして、ARスタンプラリー、ARポスター、バーチャル旅行同行、VR世界旅行、360度動画、など、近年の観光産業におけるAR技術やVR技術を取り上げた。近年、スマートフォンの普及とインターネットおよびWi-Fiの発達・普及により、スマートフォンアプリを活用した観光の仕掛けづくりが急速に広まっている。また360度カメラやVR端末の技術進歩により、低価格化と普及が進み、よりリアルな観光プロモーションが行えるようになった。2016年はVR元年といわれ、これらの端末やサービスが普及し始めた年であった。

それが、このキーワード集を発行したすぐあとの2020年度は、国際観光も国内観光も行きたくてもいけない、VRを活用するしかない、ということで、観光業へのAR・VR技術の積極的な活用が見直されることになった。

授業も急にオンラインで行う必要が生じたため、2年ゼミ（専門ゼミI）では、「YouTubeでVR旅行動画

を探して評価をする」という課題と、「VR世界旅行動画の企画書作成」という課題を出し、個人が出した評価や企画書をさらにチームで議論し、お互いに評価しあうということをオンライン上で行った。オンラインでも非常に活発な議論が行え、旅行に行けない時期だからこそ、新しい技術を活用する方法についてじっくり考える良い機会になったと思う。

(2) バックパッカーの観光について（板垣）

国際観光のキーワードとして、板垣の研究対象であるバックパッカーについて取り上げた。バックパッカーとは、一般的には安価で長期に及ぶ旅行を志向する旅行者を指すが、バックパッカーを題材にした授業では観光を契機とした多様性への理解と国際的な視野の涵養が期待できる。バックパッカーの旅行動機はいわゆる物見遊山の観光者とは異なり、旅先での文化見聞などに加えて、現地交流、自己の内面的成長など多岐にわたる。そして、ゲストハウスでのバックパッカー同士の交流、現地の生活や文化、秘境や未開の地、さらにはボランティアなども含めたあらゆるものが観光の対象となる。

観光学は観光について学ぶだけではなく、観光を通じて国際社会のあり方を考える学問でもある。コロナ蟄居の現在だからこそ大学教育における観光学の重要性を伝える必要があり、バックパッカーは国際社会をまなざすのに相応しい題材のひとつであると言えよう。

(3) イタリアの観光について（秦泉寺）

アグリツーリズム、アルベルゴ・ディフーズ、フード（ガストロノミー）・ツーリズム、ワイン・ツーリズム、スローフードといった、イタリアの観光と関わるキーワードを中心に取り上げた。イタリアは世界有数の観光目的地となる国で、日本での人気も高い。また、北をアルプス、南と東西を海に囲まれ、アペニン山脈が縦走するイタリアは、日本と類似した風土をもつ。そうしたイタリアで生まれた観光の形態や、地域おこしの運動の展開から、インバウンド観光の躍進が期待されると同時に、オーバーツーリズムなどの課題も顕在化しつつある日本の観光の現状を考える視点の提供をめざした。

2年生以上を対象とする「観光文化論」では、上述のキーワードをもとにイタリアの観光について日本との比較も織り交ぜて解説した。また、学生が課題に取り組み成果をプレゼンする機会を複数設け、例えばイタリアのアグリツーリズムの英語版ウェブサイトから各自が行ってみたい施設を選び、その魅力をプレゼンしたり、5泊7日のイタリア観光プランを作り、グループ内でプレゼンした後、グループ代表を選出、代表が履修者全体の前でプレゼンするといった企画を実施した。とりわけイタリア観光プランニングには多くの力作が寄せられ、学生に大いに刺激となったことがコメントシートからうかがえた。

3. 学科FD「PBL」について（PBL授業の経験等）

本プロジェクトによる観光PBL（Project Based Learning）教育方法の探求の成果として、学科FDを開催し、今までのPBLの経験についての知見、他大学などのPBLの例、今後のPBLのアイデアなどを持ち寄り、情報共有・情報交換と活発な議論を行った。以下は、今までのPBLプロジェクトの例の一部である。

(1) 成田空港、京成駅案内プロジェクト等（藤丸）

成田空港プロジェクト（2018年3月～9月）は、先方の担当者がとても熱心で、企画説明時にマーケティング講座もあり、提出課題のフォーマットも「選定した課題」「選定した理由」「課題解決策のターゲット」「課題解決策の内容」「実行による効果」を書き込む形式になっていた。途中での質問にも迅速・丁寧に答

えてくれるし、中間発表後は細かくコメントを書き込んでくれた。最終発表により上位3チームを選抜し、あとは直接やり取りして最終成果（成田空港FBでの記事発表）に仕上げてもらった。

京成電鉄駅ボランティアプロジェクトは、2019年度の担当者が比較的熱心で、ベストも作ってくれて各チーム1～3回ずつボランティアを実施した。私としてはその経験をもとに駅の改善案やボランティアマニュアルを作成させることに重点を置いていたが、先方としてはもっとボランティアをして欲しかった模様であった。2020年度はオリパラの時期に全学に広げて行い、PBLとしてはボランティアのまとめ役をやる予定だったが、コロナ禍により実施ができなかった。将来的には学内で英語・中国語・韓国語の会話レッスンをしてからボランティアを実施したい。また、英語力が必要とされている駅コンシェルジュのインターンもさせてもらえるようにしたい。

他にも携わったプロジェクトはいくつかあるが、今までの経験から分かったことは、協働先の担当者の熱心さとその方とのコミュニケーションが成否に大きく影響することである。また、PBLにおける学生の評価に関しては、グループワークの成果物による評価のみでは、グループへの貢献度により不公平感が残るため、貢献度に関する振り返りやグループの反省点を出させ、自己評価・他己評価も加味した方がよいことが分かった。

(2) 星野リゾート、サンリオピューロランドとの連携プログラム（板垣）

2019年度の1年生向けPBLでは、星野リゾートおよびサンリオピューロランドと連携した講義を実施した。毎週開講される教室での授業では、企業に対する理解を深めるために文献を輪読した。星野リゾートについては中沢康彦（2009）『星野リゾートの事件簿』を、サンリオピューロランドについては小巻亜矢（2019）『来場者4倍のV字回復！サンリオピューロランドの人づくり』を選定し、経営理念やマネジメントの事例について学習した。

文献での事前学習を経たあと、見学プログラムを実施した。星野リゾートでは、軽井沢ホテルプレストンコート・BEB5軽井沢・軽井沢高原教会を見学し、従業員の方から星野リゾートの事業や人材マネジメントについて説明していただいた。また、サンリオピューロランドでは、館内およびショーの見学をした。学期末には、各学生がそれぞれA4 1枚程度の報告書を作成し、企業の方にお渡しした。

参加した学生からは、「実際に現場を見学して社員の方からお話を聞けてとても勉強になった」、「働くことについて考えるきっかけになった」、などの感想が寄せられた。残念ながら新型コロナウィルスの影響で2020・21年度は見学プログラムを実施できなかったが、今後も継続してプログラムを企画・実行していきたい。

(3) デートコースプロジェクト（板垣）

2020・21年度の国際学科2年生向けPBL授業にて京成電鉄と協働した「和洋女子大生が考える理想のデートコースプロジェクト」を実施した。このプロジェクトは京成沿線を4つのエリアに分けてデートコースを作成・宣伝し、鉄道利用者の増加を目的としている。参加者は30名前後で10班に編成し、それぞれのエリアを2～3班が担当した。2020年度はパンフレット形式の冊子で、2021年度は動画形式でデートのモデルコースを提案した。

地域振興や観光ガイドブック作成などの課題に取り組むPBL授業は多くの大学で実施されており、地域の人々との交流も含めた複数回におよぶ現地調査が必須となっている。しかしながら、2020年度前期は新型コロナウィルスの感染拡大に伴いプロジェクトの日程や現地調査の見通しが立たなかったため、まず

は観光パンフレットの研究に注力した。具体的には、デザイン・文章・写真・コンセプトなどに注目させ、既存のパンフレット記事の良し悪しについてオンライン上で学生同士が議論できる場を設けた。学生の参加意識とモチベーションを持続させることも狙いであった。

後期は自治体のHP、SNSやYouTubeの投稿、口コミサイトなどのツールを駆使して沿線の情報を収集し、モデルコースを組み立てた。12月には京成電鉄の方をお招きして、最終発表会を実施し講評を頂いた。多くの困難はあったものの、実際に企業に勤めている方々と協働したプロジェクトを実施することは、学生にとって有意義な教育効果があったと考えられる。

(4) 国府台駅県境おもてなし看板デザインプロジェクト（秦泉寺）

2019年6月から2020年3月にかけて、京成電鉄と千葉県のオール千葉おもてなし隊と協働し、千葉県を訪れた方に向け、歓迎の気持ちや千葉県の魅力を伝える看板デザインの提案を行った。看板のコンセプトについてはおもに国際学科の学生が、具体的なデザインの作成についてはおもに日本文学文化学科文化芸術専攻の学生が担い、協力してプロジェクトに取り組んだ。

千葉県出身の学生が大半を占めていた一方、地域の魅力について改めて考えたことがないとの声も多く、作業は千葉の魅力の掘り起こしから始まった。利用者に看板を背景に写真をとらせてインスタ映えをねらう案は、撮影者が線路に転落する危険によりNGとなったり、普通電車の停車駅である国府台駅の場合、特急など通過電車が多く、果たして看板を目に止めてもらうにはどうすればよいかなど、さまざまな課題があったが、そうした制約のなかでの試行錯誤は学生にとってはよい経験、学びとなった。最終的には2020年3月に、千葉県各所をご当地のゆるキャラと組み合わせで紹介する看板が下りホームに設置された。お披露目式への学生参加は新型コロナウイルスの感染拡大によりかなわなかったが、自分たちのアイディアが具体的なかたちで実現したことは、参加者の自信につながった様子がうかがえた。

(5) SDGsをテーマにしたPBLの試みと構想について（杉浦）

杉浦は2年生向けのPBLのプロジェクトとして、SDGs（持続可能な開発目標）について考えるミニプロジェクトを2021年前期に行った。SDGsは環境のみならず、貧困からジェンダー平等、紛争まで幅広くグローバルな問題に取り組むための国際的な目標であり、2015年に国連において採択された。現在は、国際機関から各国政府、地方自治体、NGO、企業まで多様なアクターが取り組むようになり、近年は関連した本が多数出版されるなど、日本でも注目を集めている。本ミニプロジェクトは、そのSDGsについて理解を深め、課題解決を図り実践するものである。

2020年度のPBLをテーマにした学科FDでの提案を踏まえて、2021年4月に学生を募集し、前期は「SDGsについて知ろう」というテーマで、まず参加者は必須テキストとして蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』中公新書の第1章から3章までを読んでもらい、レポートを提出してもらった。そこでの各自の関心を踏まえて、参加者を3つのグループに分けた。すなわちSDGsの目標1「貧困をなくそう」、目標7「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」、目標14「海の豊かさを守ろう」に分け、各グループで、その目標に関して(1)日本はどのような状態にあるか、どのような問題があるか、(2)①日本政府、②企業、③自治体はそれぞれどのような取り組みをしているかを調べ、(3)今後の課題を含む感想をまとめ、PBL Iの授業時間において発表をしてもらい、講評を行った。グループワークを通じて各自の理解が深まったと考えられる。後期には、SDGsについてカンボジアとのオンラインでの共同プロジェクトや地方自治体

や企業の具体的なプロジェクト調査を行う予定である。

(6) 観光表象について (山崎)

本プロジェクトの目的は、訪日外国人観光客が動画サイトに投稿した動画を事例に、日本国内の観光地における観光表象を読み解くことである。なお、本プロジェクトの参加者は、国際学科1年生46名(1グループ3-5名、計11グループ)、グループワークでプロジェクトに取り組んだ。

観光表象を読み解くという問題設定は、初年度学生にとってそのイメージをつかむのが容易ではなく、戸惑いが生じることが想定された。そこで、まずは実際に担当教員が動画内で用いられている観光表象をとりあげ、その観光表象のありかたや観光資源化するプロセスの分析に関するレクチャーを行った。そのうえで、それぞれの学生の興味関心にしたがって、動画を選定、動画における観光現象を分析するよう学生をリードしていった。

学生らは動画の選定後、まずは動画内で表象されている観光資源の抽出及び、分析を実施した。その後、教員が、いかなる観光問題が生じているのか(観光問題提起型)、もしくはいかなる観光現象が考察可能なのか(観光現象考察型)という2類型の考察方針の道筋を提示し、学生らは作業をおこなった。なお、以下の4点は本プロジェクトの主な実施内容である。①ライブラリーワーク(対象地・テーマ・観光現象などに関する知見)、②動画分析(動画選定・観光資源抽出・分析)、③観光表象分析(観光問題・観光現象)、④プレゼンテーション、なお、これらの実施内容は、より学生の理解を深めるために教員が具体的な例を提示し、レクチャーを行った。

学生の自主的な学習に対する姿勢を育むために、教員は明確な学習の目標を設定しつつ、その手法についてはおおまかなレクチャーを行うだけにとどめ、それぞれのグループの調査対象や問題設定、プレゼンテーション方法においては学生の自主性を尊重した。とくに、学生の興味関心や自主性の尊重、ならびに多様なアプローチを推奨する姿勢を教員が明確にすることを意識してプロジェクトを運営した。このことにより、学生の積極的な参加や各々の興味関心にもとづく自由な着眼点を促す教育効果があった。また、柔軟なアプローチ手法を推奨することにより、学習に対して自己肯定感が低い学生に対しても学習意欲を失わせない雰囲気づくりを形成することに効果がみられた。さらには、分析・考察に関しては結論のみを評価するのではなく、現象へアプローチするそのプロセスも十分に評価することを強調し、学生の積極的な学習に取り組む姿勢を促した。

これらの方針のもとプロジェクトを運営し、最終的な学習の成果公表としてプレゼンテーションを実施した。プレゼンテーションでは、各グループの個性豊かなプレゼンテーションが行われ、それぞれの観光表象に関する考察が披露された。学生だからこそ思いつく自由な観光資源が着目され、観光表象が紐解かれていった。昨今の観光現象では、SNSの活用などにより従来の固定的な観光資源を分析する視座では十分にとらえることができない。これからの観光現象を分析する上では、本プロジェクトを通して学生らが考えた自由な着眼点は有益な視座を提供してくれることから、本プロジェクトは一定の教育成果を有することを認めることができる。

4. オンラインPBLについて

2020年度はコロナ禍により通常通りの授業やイベントができなくなったため、各教員が工夫して知恵を出し合い、オンラインによるPBL(Project Based Learning)としてZoomを用いた講演会や海外との交流会などを活発に行った。以下はそのいくつかの例である。

(1) タイの大学との交流会（板垣）

国際学科には海外留学を希望する学生が多くいるが、2020・21年度は多くの留学プログラムが中止または延期となった。そこで留学希望者から参加者を募り、2020年12月21日にタイのペッチャブリ・ラーチャパット（Phetchaburi Rajabhat）大学とのオンライン交流会を実施した。今回参加したのは、板垣と国際学科の学生計8名、ペッチャブリ・ラーチャパット大学からは、人間社会科学学部観光・ホテル専攻で教えるJamjun Monticha先生と学生の計8名である。

オンライン交流会では、学生が1人ずつ5～10分程度の発表を行い、双方の大学の学生と教員がそれぞれの発表に質問・コメントした。国際学科の学生は、日本の観光地、日本の四季、東京の紹介、日本とタイのコンビニの比較、ラーメンの歴史などについて発表した。ペッチャブリ・ラーチャパット大学の学生は、地元ペッチャブリの観光スポット、タイの祭り、タイの食文化、大学での学びと学生生活などについて発表した。それぞれの発表に対して多くの質問やコメントが寄せられ、当初の予定より延長するなど学生の高いモチベーションがうかがえた。

参加した国際学科の学生からは、「緊張したけれども英語で発表ができてよかった」、「タイの大学での学びや学生生活の様子を知ることができて楽しかった」、「コロナが終わったら実際に訪問したいと思った」、といった感想が寄せられた。そして参加者の中には、今回の交流会をきっかけにタイに関心を持ち、現在卒業論文でタイの少数民族と観光について執筆している学生もいる。このように、オンラインであっても海外の大学との交流会をきっかけに更なる興味・関心をもたせ、発展的な学びへと結びつけることができたと考えられる。

(2) カンボジアの大学とのオンラインでの学生交流と将来の可能性について（杉浦）

コロナ禍によって2020年以降、遠隔での授業が中心となっている。その状況は学生への教育にとって様々な課題を生んでいると同時に、遠隔ツールを通じた新たな教育機会を模索する機会にもなっている。その試みの一つとして、国際学科主催特別講演会「カンボジアの今」を2021年1月20日に実施した。ここでは、カンボジアメコン大学日本語ビジネス学科で教える樋口浩章先生に、カンボジアの現状についてオンラインで講演をお願いした。カンボジアでは、近年経済発展が進み、首都プノンペンにはイオンモールができるなど日本企業も進出し、多くの日本人が観光に行くと同時に、カンボジア人の若者が日本に働きに来るようになっている。しかし、カンボジアも現在新型コロナウイルスの影響を受けている。同講演会では、カンボジアとカンボジアの人々の「今」を、20年にわたり現地の大学で教えられ、卒業生が日本へ仕事や留学に来ているという樋口先生に、画像とともにお話しいただいた。

さらに講演の後の時間では、樋口先生が日本語などを教えている現地の学生に参加してもらい、国際学科の学生との交流会をオンラインで開催した。国際学科の学生は、身近な画像を提示し、日本での生活や文化をカンボジアの学生に紹介した。初めての試みであり、多少の通信上のアクシデントはあったものの、遠く離れた日本とカンボジア間でリアルタイムで話をする事ができて、お互いに有意義な交流の機会を持つことができた。今後、上述のPBLのSDGsについての共同プロジェクトなどを試みる予定である。

(3) 韓国留学中の学生のオンライン講演（金丸）

2020年度と2021年度は、新型コロナウイルスの感染拡大で、授業をはじめ対面での活動なかんづく学外での活動がまったく実施できない状況にあった。そうした状況下ですべての授業が遠隔になるなど制限・

変更が行われるなか、とりわけPBLの実施は大きな変更・中止が迫られることとなった。そうしたなかでその代替策として案出されたのが、テレビ会議システム（Zoom）などを利用したオンラインでの講演や交流である。

いくつか企画された海外とのオンライン交流・後援会のなかで、私が提案・実施したのが、韓国に留学中の国際学科学生とのオンライン講演・交流会である。2020年度は海外留学や研修など、国際交流事業がほぼすべて中止となるなか、幸い、感染状況が限定的であった韓国との交換留学は実施することができた。国際学科からは9月下旬に1名、2月下旬に1名を協定校であるソウル教育大学に送り出すことができた。この留学生と2021年2月8日にオンライン（Zoom）でつなぎ、今現在の韓国・ソウルの状況およびソウル教育大学での授業の状況、大学での諸活動、ソウルでの生活（当該学生は大学内の寮で生活）などについて、写真や資料を示しながら話してもらった。講演の対象は、国際学科の1～3年生である。希望者のみの参加ながら、20数名の参加があった。

講演の内容としては、韓国留学を思い立った動機、ハンゲルの勉強、留学の準備、コロナ禍での留学生活・海外生活の開始（隔離期間などの過ごし方）、現在まだすべての授業がオンラインとなっているソウル教育大学での授業の様子や履修状況、課外活動などの学生生活、今後の進路など将来の希望といった多岐にわたる内容を話してもらった。最後に10分ほど在学生との質疑の時間を取ったが、韓国での生活から今後の留学に向けての準備など、いくつもの質問が出されて、時間を過ぎても質疑は続いた。とくに今後、韓国留学を考えている学生にとっては有用な内容であったと見えて、盛んに質問をしている学生もいた。また、講演会後も、ためになったとの感想をもらい、オンラインではあったがこのPBL講演会の一定の効果があったものと考えている。

(4) TITLプロジェクト（秦泉寺）

2020年5月中旬、TITL（一般社団法人技能実習生支援機構）による活動内容やその背景に関するオンライン講演会を経て、参加者20名（2年生）でプロジェクトを開始した。前期は、TITLが運営している日本語教室（現在はオンライン開催）への参加を通し、技能実習生との交流を中心に活動を行った。日本語教室は、JLPT（日本語能力試験）に備えるものと、自由な会話を通して日本語に親しむものがあり、プロジェクト参加者はそれぞれの関心に応じ、最少2回、教室に参加し、感想や気づきの点については本学LMS上の掲示板で共有した。参加者からは、実習生の生活上のニーズや文化の違い、外国人に伝わりやすい日本語のあり方等、交流したからこそ導き出された多彩な指摘が寄せられた。

後期は、技能実習生支援のための地域情報アプリのコンテンツ作成プロジェクト（江戸川地区を中心に、外国人対応OKな病院や薬局、防犯・防災、外国の食材が入手できる店等のコンテンツを予定）を予定している。前期の日本語教室参加で得られた気づきを活かし、後期のアプリプロジェクトへとつなげていきたい。新型コロナウイルスの感染拡大によりオンラインでの実施が中心となったが、多くの学生に、与えられた条件のなかで柔軟に対応を考え、工夫するという構えがみられたことは非常に頼もしかった。延期となっている多文化共生農園の見学も、新型コロナウイルスの状況が落ち着けば、ぜひ実現していきたい。

5. まとめ（藤丸）

『キーワードで読む国際観光』については、本稿でとりあげたテーマはごく一部ではあるが、VR、バックパッカー、イタリアという各教員の専門分野に基づく観点から現在の国際観光の動向や課題などについてまとめたことが分かり、国際社会観光という新たな分野の教育の基礎体系づくりというプロジェクトの

目的に合致していることが分かった。

PBLの過去の経験については、本稿では成田空港プロジェクト、京成電鉄駅案内プロジェクト、星野リゾート、サンリオピューロランドとの連携プログラム、京成電鉄デートコースプロジェクト、国府台駅おもてなし看板プロジェクト、SDGsプロジェクト、観光表象プロジェクトについて、その概要と苦労した点や学生の反応などについてまとめた。PBLについては、コーディネーターとなる教員も大変苦労が多いが、学生の反応から、大変勉強になり学びの効果が大きいことが分かるため、今後も学科として力を入れていきたいと考えている。

オンラインPBLについては、他にも多くのオンライン講演会・交流会を行ったが、本稿では、タイの大学との交流会、カンボジアの大学との学生交流、韓国留学中の学生のオンライン講演についてとりあげた。いずれも急な必要性から企画したものであるが、海外の大学や海外留学中の学生と直に話せる機会を持つというのは、学生にとってとても良い機会となったため、今後、対面での行事が普通に行えるようになっても継続したいと考えている。

「国際社会観光」基礎体系の研究という新しい取り組みに関してさまざまな苦労もあり、途中でコロナ禍により軌道修正も求められた部分もあったが、所期の目的は十分に達成したと考えられる。

藤丸 麻紀（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）
里正 明伍（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）
板垣 武尊（和洋女子大学 国際学部 国際学科 助教）
金丸 裕志（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）
秦泉寺友紀（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）
杉浦 功一（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）
山崎 真之（和洋女子大学 国際学部 国際学科 助教）

（2021年10月12日受理）